
僕と猫

ぴっちゃぽっかりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と猫

【Zコード】

N4140BA

【作者名】

ぴつひやまつちやりん

【あらすじ】

ある家が飼っている猫のアサリと飼い主・サトルと親の物語。

僕はアサリという名前の猫を飼っています。

毎回、学校終わって帰宅すると毎日のように玄関先で「『口口さん』と倒れて待つててくれているが…時々いい事がある。

僕：「あれっ？今日はアサリちゃん迎いに来てくんないのかあ？」
つと家に上るとアサリは好物のマグロを食べていた…僕とマグロどっちが好きなんだろ？

やはり食べる事が好きなのであろうがアサリが外に外出している所を見た事がない。

おそらく外出するようになつたら今まで以上に太るのであらう。

僕：「このデブ猫が…！」僕は思わず言つてしまつた。

アサリ：「にゃん」つと言つた。

僕にはこう聞こえた…「そうよ。私はしょせん、デブ猫よ～悪い？」
つと言われた気がした。

悪くはないが肥満体型は動物や人間にしても見苦しい。

家のアサリは猫じやらしでは遊ばない。

ハタキかマグロが着いた針が着いていない釣竿だ。

ダイエットを試みた。

が、しかし、数分で飽きてしまつた。

アサリとの勝負は続いた。

決闘（前書き）

僕とアサリの勝負は続いていた…その最中、アサリが好きな母親が帰ってきた。母親はアサリの事があまり好きではなかつた。

何故ならアサリは母親は肩の上が好きで毎回、台所に立つと肩の上に上がる為に爪を立てた状態で駆け上がる。

となると当然、母親の服を爪が貫通し母親の皮膚を傷つけてしまうからだ。

母「イッターレー！」

大きな声でそう言つた。

またもアサリが母親の肩の上に上がつていた。
アサリは満足そうであつた。

家族の中で一番偉いんだと勘違いしてあるのであらうがもしかしたらもうすぐそれが実現化してしまつ未来がきてしまうであろう。

母「最近はアサリが肩に上ると肩がこつて仕方がないわ」
母はそう言つた。

僕「こんなにブツとい猫が乗るんだから肩がこるのは当然だろ！」

母「はははっ！」

僕はそう言つてやつた。

それを聞いた母親はただ単に笑つていた。

決闘

僕はアサリという名前の猫を飼っています。

毎回、学校終わって帰宅すると毎日のように玄関先で「『口口さん』と倒れて待つててくれているが…時々いい事がある。

僕：「あれっ？今日はアサリちゃん迎いに来てくんないのかあ？」
つと家に上るとアサリは好物のマグロを食べていた…僕とマグロどっちが好きなんだろ？

やはり食べる事が好きなのであろうがアサリが外に外出している所を見た事がない。

おそらく外出するようになつたら今まで以上に太るのであらう。

僕：「このデブ猫が…！」僕は思わず言つてしまつた。

アサリ：「にゃん」つと言つた。

僕にはこう聞こえた…「そうよ。私はしょせんデブ猫よ～悪い？」
つと言われた気がした。

悪くはないが肥満体型は動物や人間にしても見苦しい。

家のアサリは猫じやらしでは遊ばない。

ハタキかマグロが着いた針が着いていない釣竿だ。

ダイエットを試みた。

が、しかし、数分で飽きてしまつた。

アサリとの勝負は続いた。

決闘（後書き）

親はアサリに怒つたりは絶対しない。
何故ならアサリが甘え上手の小悪魔だからだ。
もうすぐあまい父親が帰ってくる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4140ba/>

僕と猫

2012年1月10日23時48分発行